

# 山形大学附属博物館報24

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY

1998. 3

## 目 次

数がものを言うこともある	伊藤健雄 (1)
附属博物館の三くだり半 ——利用者の立場から——	高木侃 (2)
平成9年度の特別展示『地図でみる山形』	阿子島 功 (4)
平成9年度事業報告	(6)

## 数がものを言うこともある

館長 伊藤健雄

最初に“それ”を入手したのは昭和57年5月1日であった。

米沢市教育委員会文化係の担当者から、前日の夕方、研究室に電話があった。奥羽本線大沢駅の手前、大小屋清水付近の、車道から50メートルばかり北へ入った山際の導水管の中で、“それ”は溺死していたという。導水管は、直径1メートルほどのコンクリート製ヒューム管を縦に埋め込んだもので、縁まで一杯に水をたたえていた。

翌朝、わたしと学生は車で現地に出掛けた。既に地元警察による検視も済んでいたの、到着後すぐに状況を撮影し、各部の計測や解体に取り掛かった。頭部、胸部、腰部、四肢に分離し、ポリ袋に詰めて車に収容した。内臓はすぐわきの湿地に埋めた。

以前から、県内の山野で時折“それ”が発見されるという話は聞いていたが、本腰を入れて入手するべく動いたのは、これが最初だった。<sup>(1)</sup>

“それ”は、推定年齢7歳のメスのニホンカモシカの死体であった。解体の結果、胎内にオスの胎児を宿していることも分かった。

研究室に戻ってから、すぐに骨標本の作製作業にかかった。まず全体の皮を剥ぐ。次に骨と肉を大まかに分離して、骨の付いた部分だけを大きな鍋で煮沸して肉の固まりを取り除いたのち、食品用タンパク質分解酵素の溶液中で、残っていた細かな肉片や腱などの軟組織を溶かして骨だけにす

る。さらに骨髄中の脂肪分を脱脂したり、全体を漂白したりの作業が続き、骨標本として仕上がるまでに1ヶ月程度の日数を要する。

このようにして作製した分離骨標本のうちでも、その動物についての情報を最も多く内蔵しているのは頭蓋骨である。雌雄の別<sup>(2)</sup>、体の大きさ、年齢、経産回数などが頭蓋骨から分かる。他の部分の標本が揃わなくとも、最低頭蓋骨があれば知りたい情報の多くは手に入る。

この第1号標本を皮切りに、ニホンカモシカの頭蓋骨の標本収集が始まった。県内各市町村の教育委員会に依頼していた効果はたちまち現れ、研究室や自宅の電話が、日中ばかりでなく早朝や夜中にも鳴り響くことになった。

第2号は吾妻スカイバレーから、次いで東根市、上山市、西川町、尾花沢市……と、主に内陸地方の山地帯から発見連絡が相次ぎ、収容と解体の作業はがぜん忙しくなった。冬季の“それ”は比較的取り扱い易かったが、夏季のものには難渋させられることが多かった。死因も病死、転落死、雪崩死、溺死、交通事故死などさまざまで、中には野犬に襲われたと思われるものや、密猟が疑われるもの、人間にも感染するウイルス感染症による死などもあった。

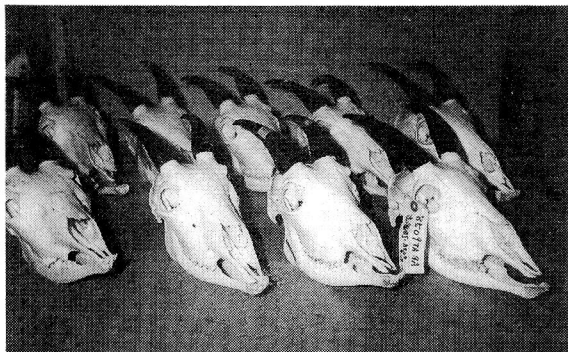
収集を開始してから10年後には、研究室の標本戸棚におよそ70体の頭蓋骨が並ぶことになった。積極的に集める努力をしなければ集まらなかった標本である。本県では、ニホンカモシカの頭蓋骨そのものはさほど珍しいものではないし、入手困難というものでもない。一つや二つではそれほど価値をもたない標本でも、数が揃うことによ

て新しい価値が生ずる場合がある。

まだまだ十分な数とは言えないが、この頭蓋骨群を仮にニホンカモシカの“山形個体群”と呼ぶことにする。本州におけるニホンカモシカの、体の大きさの地域差を明らかにする目的で、昭和58年から61年までに岩手県下で収集された47体（岩手個体群）と、岐阜・長野両県で捕獲された78体（岐阜・長野個体群）の頭蓋骨の各部を計測し、山形個体群の結果と統計的な比較を行った。

細かな部分の計測値は省略するが、頭蓋骨全体の大きさは岐阜・長野個体群より山形個体群と岩手個体群が明らかに大きく、山形と岩手の比較では、岩手の方が幾つかの計測部位で大きい値を示した。つまり、ニホンカモシカの体の大きさは、岐阜・長野—山形—岩手の順に大きくなっていると言えるのである。

これは、「恒温動物では、一般に同じ種でも、寒冷な地方に生活する個体の方が、温暖な地方に生活する個体よりも大形になる」という“ベルクマンの法則”に合致するものであり、ニホンカモシカにもこの法則が当てはまることを証明したことになる。



収集されたニホンカモシカ頭蓋骨の一部

この成果は、単独で特別な価値をもつものや、特に珍奇なものでない、言わばごく普通の資料を数多く積み重ねた結果から得られたものである。研究と教育を主目的とする、しかし必ずしも十分な予算の裏付けに恵まれない大学附属博物館の、目指すべき方向性を示唆していると言えないだろうか。ただ、気掛かりなことは、現在の附属博物館は、本学研究者の多くの貴重な研究資料が、その研究内容とともに整理・保管される仕組みになっていないことである。その原因として、研究スタッフ、予算、施設設備などの問題がある。退官後の資料や標本の保存管理について悩んでいる

のは、私だけではないと思う。

附属博物館が本学の研究教育の歴史を語る証言者となり得るよう、さらに一層の充実を図る必要があるだろう。

「注記」

- (1) ニホンカモシカは、現在、国指定の特別天然記念物である。したがって勝手に収集したり、利用したりすることは法律で禁じられている。本文中の収集と標本化は、学術資料として文化庁の許可を得て行われたものである。
- (2) 頭蓋骨では雌雄差の判別は困難であるという見解もある。骨盤(寛骨と仙骨の組み合わせさせたもの)には雌雄差があり、寛骨の幅がメスでは広く、オスでは狭い。(教育学部教授)

## 附属博物館の三くだり半

—利用者の立場から—

高木 侃

I

山形大学附属博物館には、貴重な資料が収蔵されている。資料利用者としての寄稿を求められたので、附属博物館とのかかわり、活用させていただいた貴重な三くだり半について、若干のことを述べてみたい。

私は江戸時代の離婚、とりわけ三くだり半（離縁状）と縁切寺を研究して30年になる。全国的規模で離縁状のアンケート調査を開始したのが1984年で、そのときの山形大学附属博物館からの回答も手元に残っている。回答には、古文書資料が有ること、目録で検索できること、そのなかに離縁状もある旨したためられてあった。しかも回答とともに天保6年（1835）の離縁状の写しをご恵贈いただいた。写真と積文を掲げる。

天保六年九月  
高木侃  
三くだり半  
一  
一  
一

差出申一札之事

一年拾八歳 まむ

右之者悪縁ニ付、離別仕候、  
依之何方え縁定仕候共、異乱  
無御座候、為後日仍て如件

天保六年九月五日 孝吉（爪印）

まむとの

回答には日付をうっていないなかったので、判然としないが、おそらくこの年、8月のことであつたと思う。

しばらくして後、1988年8月、アンケートの回答に基づいて離縁状の具体的な内容について再度問い合わせを行った。高橋加津美さんからご返事をいただいたが、それによって、この離縁状が故三浦新七氏収集文書であること、米沢藩領中津川村の高持百姓がその妻に渡したことを教えていただいた。現在までに880通余の離縁状を私は収集しているが、それらを研究・分析の結果、この離縁状は山形県内の離縁状の特徴を顕著にあらわしていることが判明した。離婚理由が「悪縁ニ付」であり、再婚許可の文言に「縁定」の語句を用いていることである。また、離縁状本文の前に妻の名と年齢を書くのは東北・北陸地方で散見される。

ところで、実際に附属博物館にうかがって離縁状を実見したのは、1994年11月のことで、同時に図書館所蔵の古文書調査も行い、離縁状を1通見いただいた。

## II

さて、鎌倉の東慶寺と並んで二つの縁切寺として知られたものに上州（群馬県新田郡）の満徳寺がある。満徳寺は必ずしも有名ではないが、その歴史的文化遺産に注目して地元の尾島町では1992年に資料館を建設したが、請われて縁切寺満徳寺資料館長（非常勤）に私が就任した。私は1969年に修士論文「縁切寺満徳寺考」を提出以来、この研究を続け、すでに1990年に学位（法学）論文となった『縁切寺満徳寺の研究』をあらわしていたことと勤務校が至近であった故の初代館長である。

資料館は縁切寺というきわめて明確なコンセプトを掲げているので、それに密接に関連した“三くだり半”の企画展を春秋2回開催しているが、1996年秋に4回目として“東北の三くだり半—離縁状の地域性I—”を企画した。上記の離縁状を

借用するご許可をいただいて借用に赴いたのが9月26日であった。このとき、あらたに刊行された古文書近世史料目録を検索したが、第18号の“米沢市 安田家文書”に離縁状とその返り一札などを見だし、写真を撮影させていただいた。これが武士の離縁状としては我が国で唯一のものであることを確定できたのは、翌1997年8月に調査にうかがったときである。関連文書が6通ある。まず、天保2年（1831）12月の離縁状とその返り一札を掲げよう（カッコ内は文書番号である）。写真は上が離別状、下が返り一札である。

離別状（96-6）

私妻悪縁ニ付、致  
離別候、依之人頭  
致御渡、尤再縁構  
無御座候、以上  
天保二

十二月廿五日 安田友弥 小印  
福嶋掃部殿

返り一札（96-5）

私娘悪縁ニ付、被致  
離別、依之人頭致  
御請取候、尤再縁御構無  
御座旨、致承知候、右御挨拶  
如斯御座候、以上

天保二  
十二月廿五日 福嶋掃部 ㊦  
安田友弥殿

この文書は安田家に残存したものであるから、離縁状本紙は夫から妻に渡して現物はないので写しを取り置き、離縁の承諾書である“返り一札”は逆に本物があるわけである。兩人とも米沢藩上杉

15万石の藩士で、この当時、安田友弥は416石余、福嶋掃部は500石取りの、いずれも侍組96家に属する上級家臣であった。これまで所属する藩や階層まで判明した武士の離縁状は全くなかったため、これが最初に見つかった“武士の離縁状”であり、しかも上級家臣のものというオマケつきでマスコミにも取り上げられた（1997年8月20日読売新聞東日本版夕刊、8月21日読売新聞山形県版に「上級武士の三下り半」として紹介された）。

ところで、武士の離縁には正式な離縁届けが必要であったから、その離縁に離縁状は不必要と考えられていた。しかし、御家人や若干の藩において武士の離縁でも正式な離縁届け以前に離縁状の授受を行うことがあることがわかっていた。したがって、この後には正式な離縁届けが必要であった。本事例がその手続きを明確に教えてくれる。

安田友弥は、離縁状交付の日に、侍組の一人200石取りの須田多仲に手紙にしたためている。内容は、これまで夫婦の中をなにかと心配していただきご面倒をかけたが、「何分末々之見切無御座、悪縁無是非次第」と思い、「無是非離別方決行」したことを、あしからず了承していただきたいと願ったものである。また同時にこれとは異なる別便で須田多仲に、「私妻悪縁ニ付、今日致離別候、此段組頭へ多仲様乍御苦勞御届被下度致御頼候」と組頭への正式な届出を依頼している。

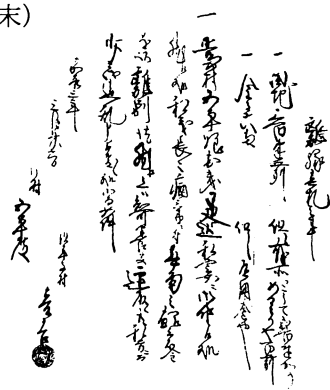
またこれら離縁関係文書は一括して袋(96-4)に入れて保管されたのであるが、その袋の裏には、組頭への離縁の届出は組合内から届けることのほか、離縁の知らせは両隣と近類ニ限定し、組合内には廻状を廻してすませたとある。安田友弥は、この当時廣居出雲組に属し、組は組頭を含め16名で構成されていた。

この離縁からほぼ1年がたった天保4年2月に508石の新津右近妹との“縁定之願(96-9)”つまり結婚願、この場合は再縁願ということになるが、これを組頭に出している。内諾をえて出されるのが通例だから、新津右近妹と再縁がかなったものと思われる。

### Ⅲ

このときの調査で、もう1通三くだり半を見つけた(目録16号次年子村 森家92-1)。嘉永3年(1850)3月のもので、離縁慰謝料として、田地と金を渡

し、かつこれを明記しているところに特色がある。(／は行末)



#### 離縁老札之事

一田地三百速苧 但し有所として二百速かり  
めくりや百苧  
一金子六両 但し 通用金也  
一当村五平娘おき、是迄私妻ニ御座候処、／然  
ル処、私義長々病氣ニ付、書面之趣意金／を  
以離別仕候、然ル上ハ賀養子迎取候共私方ニ  
て／少も違乱申間敷候処、仍て如件  
嘉永三年 次年子村

三月廿六日 音 吉㊦

同 村

五平 殿

本文は3行半に書かれている。三百速苧とは三百束刈、つまり稲束を三百束刈り取れる田地の広さを表す当地独特の表現と思われる。地域差があるろうが、どの位の広さかおわかりの方はご教示ください。以上がこれまで調査した範囲で附属博物館に所蔵されている離縁状である。博物館ではこれまで近世史料目録を第18号まで刊行している。古文書が所蔵されていても、その目録がないと実際には外部のものは全く利用できない。私はこれまでその恩恵に浴してきたが、なお大量の古文書を収蔵していると聞いている。利用者としては貴重な資料を活用するために、できるだけ早く目録化されることを期待している。

(関東短期大学教授・縁切寺満徳寺資料館長)

## <平成9年度の特別展示>

### 『地図でみる山形』

平成9年度の特別展示は、公開講座「山形たんけん隊—(山大教官の案内する)市内のフィールドミュージアム」にあわせて、そしてまた今年度に新しく

収蔵された明治45年測量の縮尺200分の1市区改正平面図（明治期の大縮尺図）のお披露目をかねて、地図展としました。主に山形市とその周辺を描いた、明治期から現在にいたるまでの様々な地図を展示しました。

地図は土地の変遷の歴史と将来を語る有力な道具です。地図のうちでも地形図は、測量によって作製され、人間の視野を越えた土地の全体像、正確な位置関係と面積関係、土地条件や土地利用を表しています。ときには地上写真や文章では表現しきれない土地の情景を記録しています。

地形図を通して、山形の土地と歴史を読んでみようというのが今回のねらいです。地理学では「地図を見る」ではなく「地図を読む」といいます。

新旧の地形図をならべてみると、地形図の技術史や作られた目的（時代背景）も読めてきます。汎用図（一般図）のはじめは軍用目的でつくられた測量図でした。最近では防災や環境保全などのための目的地図（主題図）も多く作られるようになりました。また紙印刷地図だけであったものが電子地図などへとメディアも変化しつつあります。

展示はつぎのような3部構成としました。

### I. 明治・大正時代の地図でみる山形

小縮尺図

中縮尺図

大縮尺図

### II. 最近の主題図でみる山形

環境図

防災図

### III. 紙地図以外の地図でみる山形

空中写真でみる山形

パソコン地図でみる山形

山形大学附属博物館には古文書が多く収蔵されておりますが近世古地図は多くありません。近代の地図もほとんどありません。今回展示した地図は各学部の主に地理学の研究室で教材として集められた地図や複製品をもちよりました。

＜主な展示資料＞

#### I

羽州村山郡之図（慶応4年、五十嵐家文書）

明治初期庄内地図（明治初期、村形家文書）

山形県管轄区別絵図

輯製二十万分一図「仙台」図幅

（明治21年輯製、陸地測量部）

帝国二十万分一図「仙台」図幅

（大正10年製版、大日本帝国陸地測量部）

大日本帝国予察地形図詳図「仙台」図幅

（明治40年、農商務省地質調査所）

縮尺1/20,000「山形」

（明治37年、大日本陸地測量部）拡大

市区改正平面図 七日町・横町・十日町・三日町・

八日町 1/200（明治45年）、山形市街の写真

（明治14年撮影）および現在の写真

#### II

現存植生図 1/50,000「山形」、「上山」

（昭和56年、環境庁）

土地条件図 1/25,000「山形」

（昭和60年、建設省国土地理院）

国土調査土地分類 1/50,000「荒砥」

（昭和59年、国土庁・山形県）

中山町洪水ハザードマップ 1/10,000 1/5,000

（平成9年、建設省・中山町）

地すべり地形分類図 1/50,000「山形」、「上山」

（昭和62年、国立防災科学技術センター）



縮尺1/20,000  
地形図「山形」  
（大日本陸地測量部明治37年測量）より縮小。  
現在の小白川キャンパス付近。  
この地形図は正式測量によって作製された山形の中縮尺地形図としては、はじめてのものである。  
全16面のひとつ。  
山形市の城下町の名残りや明治期の土地利用（扇頂部の桑畑）をよく読むことができる。

図郭外の地図記号一覧から軍用目的図であることも読める。

#### III

山形市西部の活断層地形 空中写真立体視

大蔵村藤田沢1980.4 地すべり カラー立体写真

山形市陣場付近（1976年撮影 馬見ヶ崎川旧河道）

山形市南部1947年米軍撮影（日飛山形工場など

4倍拡大の単写真）

1976年頃の東山形地区（真上からみた県庁 立体視）

山形市西まわりバイパス付近（1976年撮影、耕地

整理以前の地割りの判読 カラー）

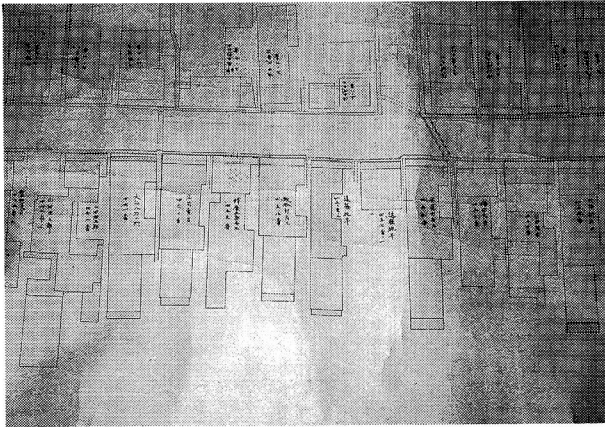
山形県遺跡地図(庄内編、内陸盆地編) PC GIS  
山形県土地情報システム PC GIS

11月10日(月)～21日(金)までの入場者は約400名を数えました。

(学芸研究員 阿子島 功 人文学部)

次の地図資料は、特別展の際に展示したものであり、新収蔵品です。

明治四十五年四月 実測 縮尺二百分一 市区改正平面図  
第巻巻 第参拾九號国道、七日町、横町、十日町、三日町  
八日町(作成者 不明) その一部を縮小。



この図面は、市北大火(明治44年5月8日)後の災害復興のために、市区改正(都市計画法の前身)の事業として道路の拡幅を実施する必要から作成されたものの一部と思われる。大火後、山形市参事会は同年5月30日にはいち早く市区改正事務所を開設し、道路の開鑿改修の立案に当たっている。

この図面のように七日町済生館角から三日町角まで8間(約14.5メートル)の道路拡幅が実現したのは、山形市が都市計画法の指定を受け(昭和3年10月)、県庁～三日町線(七日町～十日町大通り)の拡幅整備が都市計画路線に正式決定し(昭和8年8月)、都市計画事業として着工されたのは昭和10年、竣工したのは同12年8月であった。

図面では、市南大火(明治27年5月26日)後に再建された当時の七日町～十日町大通りの様子などのいくつかを読み取ることができる。すなわち

- ①商人町の基本的町割り(間口4間半×奥行き30間)が、まだ多くみられること。
- ②町家(家屋)の特徴——店・コマヤ・座敷・蔵・ツボなどの配置——に共通性があること。
- ③蔵店や土蔵が多かったこと。

- ④卸家と呼ばれる屋根付き空間がみられること。
- ⑤道路の両側にある側溝と堰とが連動していたこと。などである。

## 平成9年度事業報告

博物館実習は平成9年度から、学芸員有資格者となるための必要科目及び単位数が変更され、事前・事後指導を含む3単位となった。新規則となって初めての实習となった今年度は、人数調整のため実習期間を3回に分けて実施し、人文学部42名、理学部29名、教育学部16名の合計87名が受講した。なお、事前指導は、7月18日と8月22日の2回開講され、受講生はいずれかの日を選択し、事後指導は10月6日に実施された。

公開講座は「山形たんけん隊——市内のフィールドミュージアム——」と題し、学習の場を屋外・野外へと広げた企画でした。自分の足で歩き、山形の新発見を、というこの試みは受講者である一般市民の方々から大変好評を得ることができ、平成10年度公開講座も「山形たんけん隊 PART 2」を予定しています。

### 平成8年度見学者総数

一般成人	個人	371人
	団体	72
大学生	個人	1,496
	団体	202
児童・生徒	個人	11
	団体	135
合計	個人	1,878
	団体	409
	総数	2,287

山形大学附属博物館報 第24号 1998.3発行  
編集兼発行人 山形大学附属博物館  
〒990-8560 山形小白川町一丁目4-12  
(TEL) 023 (628) 4930 (直通)